

竹取物語論序説

——〈話型〉と〈読み〉をめぐる——

岡崎 和彦

一 『竹取物語』と説話の〈話型〉

『竹取物語』は説話の持つ〈話型〉を超えていないのだろうか。一般には、『竹取物語』は説話の持つ〈話型〉を超えていないと考えられているようだ。なるほど、『竹取物語』という物語は複数の説話の話型にきれいに分解されてしまうという特徴を持っている。たとえば、南波浩氏の分類によると、次の如くなる。

- (一) かくや姫の生ひ立ち……………(化生説話・致富長者説話)
- (二) 求婚(つまどひ)……………(求婚説話)
- (三) 難題……………(難題説話)
 - (1) 仏の御石の鉢
 - (2) 蓬萊の玉の枝
- (3) 火鼠の皮衣
- (4) 龍の首の珠
- (5) 燕の子安貝
- (四) 御狩の御幸……………(相聞説話)
- (五) かくや姫の昇天……………(昇天説話・白鳥説話・羽衣説話・貴種流離説話)
- (六) 不尽の煙……………(地名起源説話)

説話とは、極論してしまえば、〈話型〉である。固定的な伝承詞章というものもあるが、基本的には、伝承されてゆくのは個別的な〈表現〉ではなく〈話型〉なのである。そして、物語とは、その説話を母胎としつつもそれを乗り越えたところに成立するものである。しかし、だからといって物語が説話の〈話型〉を超越していなければならないということにはならない。物語

は、説話の持つ〈話型〉を丸抱えにすることによってその物語世界を構築したのである。物語が説話を超えているというのは、物語が〈話型〉以外の、説話にはなかった要素を備えているからに他ならない。物語が説話の〈話型〉を超克するのは、『源氏物語』に到つてのことであると言われている。²⁰⁾

『竹取物語』は説話の〈話型〉を超えていない——あまりにも見事に（あるいは、見るも無残に）分解し尽くされてしまったその姿を前にすると、そう思わざるを得なくなる。が、それと同時に、本当に『竹取物語』は説話の持つ〈話型〉を超えていないのだろうかという疑問もまた生じてくる。

貴種流離譚・天人女房譚・継子いじめ譚など、話型というものは、分類概念として用いられる。それゆえ、物語の中に話型を認定しようとする際にはどうしても一種の抽象化の作業が行なわれてしまう。たとえその話型との間に微妙な揺れがあったにしても、それを見ようとはしない。大筋さえ一致すれば、その話型に分類してしまうのである。私の不安はここにある。『竹取物語』は諸々の話型にきれいに分解されてしまつてはいるが、あるいはその中には微妙な揺れがあったのにもかわらず無視されてしまった場合があったのではなからうか。もちろん、仮にあったにせよ、その揺れがその話型のヴァリアントとして許容できるものであったならば問題はない。しかし、もしそうしたものでなかった場合、すなわち説話レベルにおいては決して起り得ない揺れであったならば、これは大いに問題である。そこに〈話型〉の超克を見ることができるのである。

『竹取物語』は説話の持つ〈話型〉を超えているのか、いない

のか。この問題はなお検討の余地を残す。そこで本稿では、まずこの問題を考えてゆくところから始めることにする。

具体的な作業としては、『今昔物語集』卷第三十一第三十三話「竹取翁、見付^ケ女、児^ヲ養^ヘ語^ル」²¹⁾（以下、『今昔竹取』の略称を用いる）との比較を行なう。『今昔竹取』は、『竹取物語』と内容的に極めてよく類似しているためにその内容上の先後関係が問題とされる話なのであるが、両者の関係がいかなるものであるにせよ、『今昔竹取』が説話であるという一点は動かない。『今昔竹取』との比較は、共通要素が多いだけに、説話レベルにおいては起り得ない揺れを鮮明にするのに極めて有効なはずである。

二 羽衣説話の話型の超克

『今昔竹取』は、「翁の女兒獲得と致富」・「難題求婚譚」・「帝の求婚と天女の昇天」の三部構成になっている。この三つの部分の中で『竹取物語』との決定的な違いを示しているのは、最後の「帝の求婚と天女の昇天」の部分である。『竹取物語』では、帝の求婚を拒否してから三年後に翁・嬪らの前で昇天するのに対して、『今昔竹取』では、帝の求婚を拒否したその場で、帝の目の前で昇天するのである。

この両者の違いについて、奥津春雄氏は次のように説明する。従来問題とされてきた天女昇天の時と場所が、『竹取』と相違するというのは、この「天の羽衣」の段を切り捨てたことによる結果であるが、それを天皇の行幸の日、天皇の目前で昇天することにしたのは、天皇の求婚と女の昇天がこ

の話の中心である以上、この二つの話柄を直結することが、最も端的に妖異を語ることになるかと考えたのであろう。

奥津氏は、『今昔竹取』を、『第34話の箸墓伝説と一類をなす古代の妖異譚』として、『今昔物語集』の作者が、『竹取物語』を説話化して構成した作品』と考えているために、この違いを「主題的統一をきびしく求める」『今昔物語集』の作者の意図的改変によるものと見るのであるが、果してそうであらうか。『今昔竹取』のこのようなありようは、本当に作者の意図的構成によるものなのであろうか。むしろ、帝の登場以降は羽衣説話の話型の力が作用するために、作者の意図とは無関係に必然的に帝の目の前で昇天することになったのだと考えた方がよいように思う。帝と天女の関係が語られる場面に羽衣説話の話型の力が作用するのであれば、その場面において天女が昇天するというのは至極当然のことである。

もつとも、羽衣説話というものは、養女型でない限り人間と天女との結婚のモチーフが不可欠であるから、天女が帝の求婚を拒否して結婚しないこの場合、そこに羽衣説話の話型の力の作用を認めることにはあるいは無理があるように思われるかもしれない。しかし、実は、たとえ帝と天女との結婚のモチーフがなかりと、それは羽衣説話のヴァリアントとして、特に竹取の翁と天女の養女型羽衣説話を前提としたもう一つの羽衣説話のありようとして認めることができる。

そもそも竹取説話というものは、被差別賤民であった竹取集団の致富願望が羽衣説話の話型を引き寄せた結果発生したものであり、致富のモチーフを核とする竹取中心の羽衣型説話であ

った。それゆえ、現在見られるようにそこに帝が求婚者として登場するようになったとしても、その原始的モチーフの重みを引きずっていた当初は、やはり竹取の翁と天女の関係を中心とするものであったはずである。天女に求婚する成年男子の登場となれば当然そこには羽衣説話本来の夫婦型の話型の力が作用することになるわけだが、話の中心が竹取の翁と天女の養女型羽衣説話部分にある限り、帝と天女の関係はあまり問題にならない。養女型羽衣説話としては、帝登場以前の場面において既に天女はその致富の役目を果しており、あとは昇天さえすればよい。それゆえ、羽衣説話の話型の力が作用していながらも帝と天女の関係は夫婦型羽衣説話としての十全たる展開をし得ないということになるのである。『今昔竹取』の場合も、このような理由によると考えられる。

この論を証明するには、『今昔竹取』を含め、中世以降の諸文献に採録されている竹取説話において、竹取の翁と天女の関係と帝と天女の関係の間に因果関係が認められればよい。すなわち、翁と天女の関係が中心になっている場合には天女は帝の求婚を拒否して結婚せず、翁と天女の関係の中心性が稀薄になっている場合には天女は帝の求婚を受諾して結婚する——という法則性が見い出されればよいのである。翁と天女の関係が話の中心になっているかいないかは、翁の致富のモチーフの有無によってあらわれるはずである。そこで、翁の女兒獲得——帝の求婚、という筋の展開を持つ竹取説話十六種について、翁の致富のモチーフの有無・帝の求婚に対する天女の態度・およびその後の天女の行動、の三点を調査した結果を次に示す。

文献名	翁の致富のモチーフ	帝の求婚に対する天女の態度	その後の天女の行動	備考
今昔物語集	○有	×拒否	昇天	
海道記	○有	×拒否	昇天	
古今集注	×無	? (翁が拒否)	昇天	翁が天女を連れて昇天する
同右	×無	? (翁が拒否)	昇天	翁が天女を連れて昇天する
毘沙門堂本 古今集注	×無	○受諾	去る	
古今為家抄	×無	○受諾	失せる	
古今和歌集序 聞書三流抄	×無	○受諾	失せる	
古今和歌集 大江広貞注	×無	? (翁が拒否)	昇天	翁が天女を連れて昇天する
頓阿古今序注	×無	○受諾	失せる	
了誉古今序注	×無	○受諾	失せる	
和歌百首注	×無	○受諾	空しくなる	
三国伝記	×無	○受諾	昇天	

本朝神社考	詞林采葉抄	聖德太子伝 拾遺抄	臥雲日件録 尤
×	×	×	×
無	無	無	無
×	×	○	○
拒否	拒否	受諾	受諾
富士山の岩窟に入る	富士山の岩窟に入る	昇天	昇天
帝は天女の後を追 い、ともに留まる	帝は天女の後を追 い、ともに留まる		

右の表を見ると、翁の致富のモチーフの有無と帝の求婚に対する天女の態度との間に関連がありそうなことは容易に察せられる。翁の致富のモチーフがある場合には、天女は帝の求婚を拒否して昇天し、翁の致富のモチーフがない場合には、天女は帝の求婚を受諾して結婚し、その後昇天（あるいは、失せるなど）する——という法則性がおおよそ取り出せそうである。

『古今集注』・『古今和歌集大江広真注』所載の三種と『詞林采葉抄』・『本朝神社考』所載の二種はこれにあてはまらないが、前者は翁が帝の求婚を拒否して天女を連れて昇天するという形になっているからあてはまらなくても問題とはならないし、また後者は、本地物となっており、しかも帝が富士山の岩窟に入った天女の後を追、天女の希望によってそこに一緒に留まるという特殊な形になっていることから、例外として扱ってよからう。従って、先の論は成立することになる。

竹取説話が竹取集団を離れて伝承されてゆく過程において、竹取の致富という始原的モチーフは稀薄化してゆく。致富のモ

チーフが稀薄化してゆけば、翁と天女の関係の中心性も稀薄化してゆく。そうなると、翁と天女の関係の中心性に規制されて結婚のモチーフを持たなかった帝と天女の間には、それから解放され、羽衣説話本来の夫婦型へと変化してゆく。そして、この変化に伴って竹取説話の中心が帝と天女の方に移行してしまうことにより、循環的に竹取説話における翁と天女の関係の地位は低くなり、翁の存在は稀薄化の一途をたどることになる。『三國伝記』所載の竹取説話のように、その冒頭において「富士郡^二作^レ竹翁^ト云^フ者アリ」と翁を登場させておきながら、それきり一度も翁について語るものがないものがあるのは、このことを端的にあらわしている。

『今昔竹取』において帝の目で天女が昇天するのは、帝の登場以降羽衣説話の話題の力が作用するからであり、説話レベルにあっては至極当然のことなのである。言い換えるならば、説話レベルにおいてはそのようにしかあり得ないのである。従って、仮に奥津氏の言うように『今昔竹取』が『竹取物語』を

原拠としたものであつたにせよ、その「帝の求婚と天女の昇天」の部分のありようは、『今昔物語集』の作者の意図的な改変操作によるものと見るよりはむしろ、作者の意図を超えたところにある説話の論理によるものと見た方が妥当である。まさに、「説話化」なのである。

さて、そうすると、もし『竹取物語』においても帝の求婚譚部分に羽衣説話の話型の力が作用していることが認められるならば、帝の求婚を拒否していながらその場で天女が昇天しないという『竹取物語』のありようは、羽衣説話の話型の力に逆らっていることを示すことになる。

『竹取物語』

常に仕うまつる人を見給ふに、
かぐや姫の傍らに寄るべくだ
にあらざりけり。こと人より
はけうらなりと思しける人の、
かれに思し合はずれば、人に
もあらず。かぐや姫のみ御心
にかかりて、ただ独り住みし
給ふ。よしなく御方々にも渡
り給はず。

『今昔竹取』

其^ノ後^ハ天皇、彼^ノ女^ヲ見給^ハルニ、
実^ニ世^ニ不^似ズ形^チ・有^様微妙^{カリ}
更^ニ甲^斐无^ク止^ニケル。

『竹取物語』と『今昔竹取』の、帝の求婚譚の末尾部分を引用した。ともに、天女を手に入れることができずに空しく帰った帝の姿を描いている場面である。

両者を比較すると、一見して、よく似ていると言うことができる。奥津春雄氏は、従来注釈的挿入句かとされてきた『今昔竹取』の傍線部の文脈の乱れを『竹取物語』の傍線部との関連の下に解き明かし、『今昔竹取』が『竹取物語』を原拠としていたことの一徴証としている。それはともかくも、昇天しないまま地上に留まっている天女を手に入れることのできなかつた帝についての叙述と、天女に昇天されて手に入れることのできなかつた帝の後日譚部分の叙述とがよく似ているということは、やはり注目していい。『竹取物語』のこの叙述が『今昔竹取』の後日譚部分の叙述に類似しているということは、『竹取物語』における帝—かぐや姫の物語が羽衣説話の話型からすれば本来はそこで終わるはずのものであること、すなわち『竹取物語』の帝の求婚譚部分には羽衣説話の話型の力が作用していることを、表現の上で示しているのである。仮に、『今昔竹取』が『竹取物語』を原拠としたものであるにしても、羽衣型説話の後日譚部分に『竹取物語』のこの部分の叙述が使われたということは、やはり、『竹取物語』のこの部分が羽衣説話の終末の様相を示しているからに他なるまい。いずれにせよ、『竹取物語』における帝の求婚譚部分に羽衣説話の話型の力が作用していることは認められるのである。

羽衣説話の話型からすれば、帝と天女が結婚しない場合、『今昔竹取』のように天女は帝の求婚を拒否したその場で昇天しなければならぬ。ところが『竹取物語』の場合、天女は帝の求婚を拒否していながらもその場で昇天せず、相変わらず地上に留まっている。これは、羽衣説話の話型の力に逆らつたありよ

うである。従つて、『竹取物語』は説話の持つ話型そのままではなく、明らかにそれを超えているということになる。

『竹取物語』において、最終的には天女は昇天する。その点からすれば、羽衣説話の話型は何ら変容を蒙っていない。しかしながら、『竹取物語』の叙述の上にその話型のありようを具体的にたどつてみると、今見てきたように話型の力に逆らつてい部分が微妙な揺れとして確かに存在しているのである。

従来、〈話型〉というものを、分類概念としてあまりに構造的に客体化しすぎていた。しかし、〈話型〉の本体は、構造それ自体ではない。〈話型〉の本体は、表現主体に作用する力なのであつて、通常我々が〈話型〉と呼んでいるものは、表現の上にあらわれたその結果にすぎない。〈話型〉というものをこのように捉える時、今まで見えてこなかつた様々なことが見えてくるようになるのである。

三 話型の力と構想

それにしても、いったい何が羽衣説話の話型の力を抑え、帝の求婚譚においてかぐや姫を昇天させなかつたのであろうか。

この問題を考えるには、かぐや姫が昇天しなかつたことによつて何がもたらされたかを見ればよい。もし帝の求婚譚中においてかぐや姫が昇天してしまつたならば、物語はそこで終わつてしまふ。ところが実際は、そこで昇天しなかつたことにより、次に場面が変わつて、翁とかぐや姫の関係を核とする、かぐや姫の昇天をめぐる例の悲劇的は場面が語られている。そこは『竹取物語』の中で最も感動的な場面で、一篇のクライマックスを

なしている。このことからすると、『竹取物語』の作者には、かぐや姫の昇天を、帝とかぐや姫の関係において語られる場面ではなく、翁とかぐや姫の関係において語られる場面で、翁とかぐや姫の親子の情愛を核とした別離の悲劇のうちに描きたいという構想があつたのではないかと考えられる。

昇天場面以前にも、『竹取物語』の作者は翁とかぐや姫間の親子の情愛というものを熱心に描いている。五人の貴公子の求婚譚の冒頭部には、かぐや姫への親としての愛情ゆえに熱心に結婚を勧める翁の姿と、翁への親としての愛情ゆえに不本意ながらも翁に押し切られてしまふかぐや姫の姿が、ほとんど両者の会話のみによる構成で詳しく描かれている。また、帝の求婚譚の前半部には、叙爵に目が眩んでかぐや姫に宮仕えを勧める翁がかぐや姫の猛烈な抵抗にあつて、未練を残しつつも結局かぐや姫大事ということで一度は断念するという様子が、これもまたほとんど両者の会話のみによる構成で詳しく描かれている。そして、さらに重要なのは、これらの場面が、それ自体中心となる枠内で語られているのではないということである。すなわち、前者は五人の貴公子の求婚譚という大枠の内において、後者は帝の求婚譚という大枠の内において語られているのである。五人の貴公子の求婚譚・帝の求婚譚の枠内において問題となるのはあくまで五人の貴公子とかぐや姫・帝とかぐや姫の関係であつて、翁とかぐや姫の関係などどうでもよく、あまり問題にはならない。説話レベルにおいてはまず語られることはない。それがこれ程までに語られているのである。このことは、『竹取物語』の作者が翁とかぐや姫間の親子の情愛のモチーフをい

かに重要視しているかということのあらわれに他なるまい。

さて、このように、作者の構想が羽衣説話の話型の力を抑えて帝の求婚譚中においてかぐや姫を昇天させなかつたと考えられるわけであるが、次に、その構想と話型の力との拮抗のありようを物語表現の上に具体的に見てみよう。

帝が自ら求婚にやつて来る場面は、『今昔竹取』では次のような筋の展開を有する。

A 帝、女の美質に感動し、后にしよんとする。

B 女、自分が地上の人間ではないことを告白し、求婚を拒否する。

C 帝、信用しない。

D 女、昇天する。

E 帝、女が人間でなかつたことを知り、あきらめる。

このような展開がおそらくは羽衣説話の話型の力による本来のあり方であると考えられるのだが、『竹取物語』の場合もこれとほとんど同じ展開の仕方をしてゐる。『今昔竹取』のこの展開に従つて『竹取物語』の本文を分割し、『今昔竹取』の本文とともに次に示す。

<p>A 既ニ御マシ着タルニ、家ノ有様微妙ナル事王ノ宮ニ不異。女ヲ召出ルニ即チ参リシ天皇此ヲ見給ニ、実ニ世ニ可譬キ者无ク微妙ト云フ。人</p>	<p>『今昔竹取』</p>	<p>『竹取物語』</p>	<p>かぐや姫の家に入り給うて見給ふに、光満ちて清らにて居たる人あり。「これならん」と思ひて近く寄らせ給ふに、逃げて入る袖をと</p>
---	---------------	---------------	---

<p>ニハ不近付ヤリケルナメリト喜ツ思シ食テ「ヤガテ具シテ宮ニ返チ后ニ立ナム」ト宣フニ、</p>	<p>らへ給へば、面をふたぎて候へど、はじめて御覧じつれば、類なくめでたく覚えさせ給ひて、「許さじとす」とて、率ておはしまさんとするに、</p>
<p>B 女ノ申サテ、「我レ后ト成ラムニ无限キ喜也ト云ヘド、実ニハ己レ人ニハ非ヌ身ニテ候ウ也」ト天皇ノ宣ク、「汝然ハ何者ツ。鬼カ神カト。女ノ云ク、「己レ鬼ニモ非ズ、神ニモ非ズ。但シ己ヲバ只今空ヨリ人来テ可迎キ也。天皇速ニ返ラサ給ヒネ」ト</p>	<p>かぐや姫答へて奏す、「おのが身は、この国に生まれて侍らばこそ使ひ給はめ。いと率ておはしましがたくや侍らん」と奏す。</p>
<p>C 天皇此レヲ聞給テ、「此ハ何ニ云フ事ニカ有ラズ。只今空ヨリ人来テ可迎キニ非ズ。此レハ只我ガ云フ事辞ヒムトナク云ナリ」ト思給ケル程ニ、</p>	<p>帝、「なかかさあらん。なほ率ておはしまさん」とて、御輿を寄せ給ふに、</p>
<p>D 暫許有テ、空ヨリ多人来テ與テ持来、此ノ女ヲ乗セテ空ニ昇リ。其迎ニ来レル人姿、此ノ世ノ人ニ不似サリケレ。</p>	<p>このかぐや姫、きと影になりぬ。</p>
<p>E 其ノ時ニ天皇、「実ニ此ノ女、只人ニハ无者有」ト思シテ、宮</p>	<p>「はかなく口惜し」と思ひて、「げにただ人にはあらざ</p>

りけり」と思して、「さらば御供には率て行かじ。もとの御かたちとなり給ひぬ。それを見てだに帰りなむ」と仰せらるれば、かぐや姫、もとのかたちになりぬ。

両者の筋の展開の類似には驚くべきものがある。もつとも、『竹取物語』の場合かぐや姫は「きと影にな」るだけで昇天はしないから、完全に一致するわけではない。しかしながら、かぐや姫が「影」になることは、帝に自分が地上の人間ではないことを知らしめ、結婚を断念させており、機能的には昇天と全く同じになっている。

構想からすれば、作者は帝の求婚譚中においてかぐや姫を昇天させることはできない。が、一方でその作者は羽衣説話の話型の力から解放されてはいなかった。それは『今昔竹取』との展開の類似に明らかである。話型の力は強力に作者を規制している。『竹取物語』の作者は、基本的には羽衣説話の話型の力に従いながらも——従わざるを得なかったと言うべきだが——ただ一箇所、昇天を「影」になることに置き換え、それに昇天と同じ機能を持たせて話型からの要請をそれなりに満たすことにより、自らの構想を生かすことに成功したのである。

話型の力は強力である。構想といえども、作者をそれから完全に解放することはできなかった。話型の力を無視して構想を生かすことは、『竹取物語』の段階においてはできなかったの

ある。先に、構想が話型の力を抑えたという言い方をしたが、以上見てきた如くそれは構想が話型の力を圧倒したというのではなく、話型の力との微妙な均衡関係を保ちつつ何とか生かされたのだということになる。ここに『竹取物語』の達成と同時に、限界も見ることができぬ。

四 話型の超克と物語の文体

作者の構想が話型の超克を可能にした、と一応結論づけた。しかしながら、単に作者の構想に帰するだけではどうも安易に過ぎるという気がしている。確かに作者の構想がそれを可能にしたのに違いないのではあるが、さらに一步詰めて、『竹取物語』の表現の中の何がその構想の実現を可能ならしめたのかということもやはり問うておかなければならないと思うのである。

説話においては、表現は話型に完全に従属する。説話の表現は、その場面に作用している話型にのみその根柢を持つものであり、話型を脅かすということは決してあり得ない。それが説話の文体である。物語は説話を母胎として成立したものであるから、特に初期物語の場合、説話の文体からの拘束は強かったはずである。まして『竹取物語』の場合は、竹取説話という具体的な説話を素材としているのだから、その拘束力はとりわけ強いものであったに違いない。そのような状態にある『竹取物語』の作者にとつて、話型の力に逆らつて、すなわち説話の文体に反してかぐや姫を昇天させないということは、果して構想だけで可能であろうか。いくら作者に構想があつたにしても、それを表現の上に具体的に実現させるのを可能にするものが『竹

取物語』の表現の中になければ、それは説話の文体の下にあえずなく押し潰されてしまったに違いないのである。

帝の求婚譚という枠内において問題となるのは、あくまで帝と天女の関係である。翁と天女の関係など全く問題にはならない。それが説話の文体である。現に『今昔竹取』の帝の求婚譚を見ると、そこに登場しているのは帝と天女の二人だけであつて、翁については何ら語られるところがない。このような説話の文体の強い拘束下にある者が帝の求婚譚を描く場合、たとえあらかじめ翁―天女間の親子の情愛を核とする昇天場面を描こうという構想を抱いていたとしても、それが意識されることはまずあるまい。表現主体の頭の中を占めるのは、帝と天女の関係のことだけであるはずだ。従つて、帝の求婚譚の枠内においてその構想が意識され生かされるためには、その枠内に翁と天女の親子関係を意識させるだけの表現が存在しなければならぬはずである。

『竹取物語』の帝の求婚譚は次のような構成をとっている。

A かぐや姫の噂を耳にした帝は内侍中臣房子を派遣するのだが、かぐや姫は姫の説得にもかかわらず断固として対面しようとしなない。

B 帝は叙爵を餌に翁を懐柔するのだが、翁はかぐや姫の猛烈な抵抗にあつて宮仕への説得に失敗する。

C 帝は自ら求婚に行くが、かぐや姫が人間でないことを知り、結婚を断念する。

D 帝はかぐや姫と歌の贈答を行ない、未練を残しつつも帰る。

E 帝の断ち切れぬ思いはいよいよ深く、かぐや姫と文のやりとりを行なう。

説話レベルにおいては、『今昔竹取』がそうであるように、帝の求婚譚はいきなり帝自らの求婚から始まるのであるが、『竹取物語』の場合、帝自らの求婚の前にA・Bという叙述が存在している。特に注目すべきは、Cの直前に位置するBの叙述である。そこには、先にも触れたように、叙爵に目が眩んでかぐや姫に宮仕えを勧める翁とそれに猛烈に抵抗するかぐや姫とのやりとりが描かれていた。

翁、喜びて、家に歸りてかぐや姫にかたらふやう、「かくなむ帝の仰せ給へる。なほやは仕うまつり給はぬ」と言へば、かぐや姫答へていはく、「もはら、さやうの宮仕へ仕うまつらじと思ふを、しひて仕うまつらせ給はば、消え失せなんず。御官冠^{みゝかんむり}仕うまつりて、死ぬばかりなり」翁いらふるやう、「なし給ひ。官冠も、わが子を見たてまつらでは、何にかはせむ。さはあるとも、なか宮仕へをし給はざらむ。死に給べきやうやあるべき」と言ふ。「なほそら言かと、仕うまつらせて、死なずやあると見給へ。あまたの人の心ざしおろかならざりしを、空しくなしてこそあれ。昨日今日

帝のたまはんことにつかん、人聞きやさし」と言へば、翁、答へていはく、「天下のことは、とありとも かかりとも、御命の危きこそ、大きな障りなれば、なほ仕うまつるまじきことを、参りて申さん」とて……

執拗に宮仕えを勧める翁にかぐや姫は「なほそら言かと、仕うまつらせて、死なずやあると見給へ」と言ひ放ち、ここに両

者の親子関係は崩壊寸前にまで到るが、「御命の危きこそ、大きな障りなれば」と翁が折れることによりそれはかろうじて回避される——Bのこの叙述は、帝の求婚譚の枠内において翁とかぐや姫の関係を意識させ、構想を意識させるのに十分な表現である。従つて、帝の求婚譚の枠内に、しかも帝自らの求婚の直前にBのような叙述が存在することによって、構想は意識され実現されたのだと考えられる。その意味において、話型の超克を可能にしたのはBに描かれた表現であると言ふこともできよう。

帝の求婚譚という枠内において、直接帝と天女とが交渉を持たないA・Bのような場面が表現されるということは、説話レベルにおいてはまずあり得ない。このような場面の複式化はすぐれて物語レベルのものであり、物語の文体であると言える。このような文体がいかんして発生したかという問題についてはさらに考えなければならぬところであるが、ともあれ、そうした文体が獲得された段階に到つて初めて、作者の構想は生かされるのである。「竹取物語」における話型の超克は、作者の構想だけによって可能となつたのではない。その構想の実現を可能にするだけの文体が既に獲得されていたということにもそれは強力に支えられていたのである。

五 羽衣型展開からの偏差

帝が自ら求婚にやつて来てからの話の展開が羽衣説話の話型による展開の仕方とほとんど一致するということについては既に見た通りであるが、一方そこには羽衣型展開からの偏差も確

かに存在している。

かぐや姫が「きと影にな」つた時、帝はかぐや姫との結婚を断念した。ここに帝とかぐや姫の結婚不可能は決定的になつた。それゆゑ、元の姿に戻つたかぐや姫を見て、

帝、なほめでたく思しめさるることせきとめ難し。

と断ち難い思いにかられたにしても、羽衣型展開からすればもはやどうなるものでもなかつたはずである。この後、帝とかぐや姫の間に物語があるとすれば、それは女を手に入れることのできなかつた男の嘆きを語る羽衣説話の後日譚的物語、すなわちもはや新たな展開を見せる可能性の全くない物語でしかないはずである。ところが実際の物語の展開は、この帝の感情を起点に、そのような方向からの微妙な偏差を示し始める。

帝、かぐや姫を留めて帰り給はんことを、あかず口惜しく

思しけれど、魂を留めたる心地してなむ帰らせ給ひける。

御輿にたてまつりて後に、かぐや姫に、

帰るさの行幸もの憂く思ほえてそむきてとまるかぐや

姫ゆゑ

御返事を、

律はふ下にも年は経ぬる身のなにかは玉のうてなをも

見む

帝は、帰り際にかぐや姫へ歌を詠みかける。結婚不可能が決定的になつた後の未練の歌である。これに、かぐや姫は返歌をしてゐる。一見すると何のこともないようだが、実は、これは極めて重要なことである。

五人の貴公子の難題求婚譚においては、かぐや姫が返歌をす

るのは求婚者との結婚が不可能となった時であった。その点において、この帝の求婚譚の場合も何ら変わるところはない。

このかぐや姫の返歌もまた、結婚が不可能となったことに支えられている。が、五人の貴公子の難題求婚譚の場合、かぐや姫が返歌をするのは、結婚不可能が決定的になる前に求婚者が詠みかけた歌に対してであった。結婚不可能が決定的になった後に詠みかけられた歌に対しては、かぐや姫は決して返歌をしなかった。

白山にあへば光の失するかとはちを捨てても頼まるるかな

と詠みて入れたり。かぐや姫、返しもせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、言ひかかづらひて帰りぬ。

本物と偽って差し出した仏の御石の鉢が贗物であることが既に露見したにもかかわらず、石作の皇子は厚かましくも未練の歌を詠みかけた。が、かぐや姫は全く相手にしなかったのである。そう考えてくると、帝の未練の歌に対してかぐや姫が返歌をしたというのは、極めて異例のことであると言わざるを得ない。

そしてそのかぐや姫の異例の返歌は、帝の断ち難い思いをさらに一層増幅する。

これ（『かぐや姫の返歌』を、帝御覧して、いかが帰り給はん空もなく思さる。御心は、さらに立ち帰るべくも思されざりけれど、さりとて夜を明かし給ふべきにあらねば、帰らせ給ひぬ。

いったい、今さら帝の思いを増大させて何になるのか、と思

う。が、このことは帝に新たな行動をやらせることになる。空しく帰り「独り住み」する帝は、なおもかぐや姫との接触を求めらる。

かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はせ給ふ。御返り、さすがに憎からず聞こえ交はし給ひて、おもしろく、木草につけても御歌を詠みてつかはす。

『今昔竹取』の場合、還御後の帝の断ち難い思いは、「更ニ甲斐无ク止ニテ」と空しく終わってしまったが、『竹取物語』の場合、それはかぐや姫へ「御文」を通わすということへと展開している。もちろん、この違いは、天女が昇天しているかいないかということによるところが大きい。しかしより具体的には、『竹取物語』の場合歌の贈答によって帝の思いが『今昔竹取』以上に増大させられていたというところはその原因はあつたのである。

そしてさらにここで注目すべきは、その帝の文に対してかぐや姫が「御返り、さすがに憎からず聞こえ交はし」ということである。この文のやりとりによって、帝とかぐや姫の関係は断たれることなく継続し、帝は物語の舞台に繋ぎ留められることになる。二人の文のやりとりは、以後かぐや姫昇天までの三年間続く。帝とかぐや姫の物語は、両者の結婚不可能が決定的になつてもなお終わることはできないのである。ここに、羽衣型展開からの偏差は決定的になる。

羽衣型展開からすれば、帝は、かぐや姫を手に入れることができず空しく帰ったところで物語の舞台から退場しなければならなかつたはずである。ところが実際は、帝はなおも物語の舞

台に繋ぎ留められている。帝の歌への返歌といい、帝の文に對する返事といい、かぐや姫に異例の行動をとらせてまでそうしなければならなかつた理由は、いったいどこにあるのであろうか。

もちろん、これを作者の構想として考えることもできる。というよりも、これが作者の構想によるものであることはおそれなく間違ひあるまい。が、ここで考えたいのは、作者にそのような構想を抱かした根源的な力が何であるのかということなのである。

羽衣説話の話型からすれば、帝の求婚譚中においてかぐや姫を昇天させなければならなかつた。ところが作者の構想からすれば、そこでかぐや姫を昇天させるわけにはいかなかつた。そこで作者は、昇天を「影」になることに置き換えることにより、自らの構想を生かし、話型からの要請も機能面においてそれなりに満たすことに成功したのであつた。しかしながら、かぐや姫を「影」にすることは所詮羽衣説話の話型からの要請を完全に満たすものではない。昇天をもって終わるとするのが羽衣説話の話型である。作者は強力に話型の力に規制されていた。それゆゑ、当然作者の意識の根底には、自覚的であろうと無自覚的であろうと、帝とかぐや姫の關係の究極的な破局はかぐや姫の昇天でなければならぬという認識が存在してはいたはずである。帝が物語の舞台に繋ぎ留められなければならなかつた根源的な理由は、ここにあると考へられる。一見羽衣型展開からの偏差として見える現象も、実はまた羽衣説話の話型の力によるものだったのである。

六 帝をどう読むか(1)

帝が物語の舞台に繋ぎ留められたことにより、翁—かぐや姫の關係だけでなく、帝—かぐや姫の關係もまたかぐや姫の昇天へと向う。

ところが、ここに一つ奇妙なことがある。かぐや姫の昇天場面に帝がいないのである。翁の出兵要請に對して帝は「六衛の司あはせて二千人」の軍勢を派遣するのだが、それには高野大國を勅使としてつけるのであつて、帝自らが乗り込んで行くわけではなかつたのである。「かぐや姫のみ御心にかかりて、ただ独り住み」までしたあの帝が、かぐや姫が月の都へ連れ去られてしまふかもしれないという重大な局面にあつて、何故に自ら陣頭に立つて昇天を阻止しようとしなかつたのであろうか。

あるいは、これは、天皇としての立場によるものかもしれない。日本国の王たる天皇が、たかが女一人のことでそう簡単に陣頭に立てるわけがない。それに月の都からかぐや姫を迎へが来るということ帝が知らされるのは、その八月十五日のまさに直前。急にそういうことを言われても、簡単に都合がつくとは思えない。

それに何よりも、帝自らが乗り込んで行くことは、実はタブーに触れる。「天皇と宝劍は不二一体であり、宝劍を安置したところに就寝しなければならぬ、というタブー」が存在していたのである。月の都からかぐや姫を迎へが来るのは八月十五日の夜。それもいつやつて来るのかわからない。そんな時間に天

皇が宝剣を安置してある夜のおとどを離れ、都を離れ、「山本近」い竹取の翁の家にいることなどできるはずがない。

しかしながら、これで疑問が氷解するかというと、そうもいかない。次に引用するのは、かぐや姫昇天前に帝が登場する唯一の場面、八月十五日に月の都からかぐや姫を迎えが来るということを帝が知らされる場面である。

御使帰り参りて、翁のありさま申して、奏しつることも申すを、聞こしめして、のたまふ、「一目見給ひし御心にだに忘れ給はぬに、明け暮れ見なれたるかぐや姫をやりてはいかが思ふべき」。かの十五日、司々に仰せて、勅使少将高野大国といふ人を指して、六衛の司あはせて二千人の人を、竹取が家に遣はす。

タブーに触れるために自ら乗り込むことができないのであれば、そこにはなにかの内的な苦悩・葛藤があつてよさそうなものである。たとえば『源氏物語』では、病篤しくなつてゆく桐壺更衣を死の穢れのタブーゆえに宮中に留め得ない桐壺帝の葛藤・苦悩が悲痛なまでに描かれている。ところが『竹取物語』の場合、そのようなことは全く語られていない。それゆえ、先に挙げた理由だけでは今一つ説得力に欠けることになるのである。

むしろ注目すべきは、右に引用した場面の帝の言葉である。その中で帝は、かぐや姫に対する自らの思いと翁の思いとを比較して相対化している。そして翁に対して同情さえしている。つまり、かぐや姫が月の都へ帰つてしまふということ聞かされてもそうできる程までに、帝は冷静なのである。翁がかぐや

姫から八月十五日のことを聞かされた時の、

翁、「こは、なでふことのみたまふぞ。竹の中より見つけきたりしかど、菜種の大ききおはせしを、わが丈立ち並ぶまで養ひたてまつりたるわが子を、何人か迎へきこえん。まさに許さんや」と言ひて、「われこそ死なめ」とて、泣きのしること、いと堪へ難げなり。

という狼狽・悲嘆ぶりと比べると、まことに帝は落ち着いてゐる。もしこの時の帝が三年前と変わらば、「かぐや姫のみ御心にかかりて」という状態にあつたならば、かように冷静な態度をとることはできなかつたに違いない。もつとも、天皇という立場上翁のように感情的になつて取り乱すことはできないということもあろうが、それを差し引いたとしてもやはり、この帝の態度は注目していい。

帝はかぐや姫への断ち難い思いを抱いていた。しかし、それは所詮結婚不可能を前提としたものでしかなかった。いくらかぐや姫を思つていたところで、もはや結婚はあり得ないのである。ここに三年という歳月の経過を思う時、結婚の可能性が閉ざされていたためにかぐや姫への執着が鎮静化したのではなからうか、だからかぐや姫が月の都へ帰つてしまふことを聞かされても冷静でいられ、だから自ら昇天阻止に行けないことに對して苦悩することがなかったのではなからうか——と考えることができる。かぐや姫への思いが絶えてしまつたというのではなからうが、事態を冷静に受け止められるだけの心の落ち着きと余裕を帝は確かに持っているのである。

もつとも、その三年間については、ただ、

かやうに、御心を互ひに慰め給ふほどに、三年ばかりありて……

と語られるだけで、より具體的ひはどのようなことがあつたのか、そしてその間に帝の心の中でどのような変化が起つたのかということについては全く伺い知ることができない。それゆゑ、叙上の読みは、点と点をその間に介在する「三年」という時間にことよせて單純に結んで見せただけの、極めて單絡的な深読みに過ぎないのかもしれない。が、深読みでも何でも、空白の三年間をそう読むことが可能な程の叙述がなされていることは重視しなければなるまい。

七 帝をどう読むか(2)

地上の人間達の努力も空しく、ついにかぐや姫は月の都へ昇天していった。

その後、翁・嫗、血の涙を流して惑へど、かひなし。あの書き置きし文を読み聞かせけれど、「なにせむにか、命も惜しからむ。誰がためにか。何事も、用もなし」とて、薬も食はず、やがて起きも上がらで、病み臥せり。

翁の悲嘆ぶりが描かれているこの場面に、「薬も食はず」とある。ややもすると、この「薬」をかぐや姫の残し置いた不死の薬と読んでしまうのであるが、果してそれが不死の薬であるのかどうかについては、厳密に言えば不明である。不死の薬は帝に残されたのであつて、翁には残されなかつたからである。かぐや姫は翁に不死の薬を残すべく「少し形見とて、脱ぎ置く衣に包まんと」したのだが、天人がそれを許さなかつたのだ。し

かし、「薬も食はず、やがて起きも上がらで、病み臥せり」とあるように、「薬」を口にしなかつたのは「病み臥せ」る前のことであるから、その「薬」が病氣治療のための薬でないことだけは確かである。このあたり、語りのルーズさがあらわれているのだが、ともあれ、ここに「薬も食はず」と語られるのは、翁はかぐや姫の残した不死の薬を口にしなかつたが、帝はどうしたのか、という物語展開の軸が存在しているからに他なるまい。かぐや姫昇天後の物語は、単なる羽衣説話の後日譚としてではなく、帝による不死の薬の処置を主題とする物語として展開してゆく。それゆゑ、そこをどのように読むかという問題は、「竹取物語」という作品を考える上で極めて重要なはずである。

中将、人々引き具して帰り参りて、かぐや姫をえ戦ひ止めずなりぬること、こまこまと奏す。薬の壺に御文そへ、参らす。ひろげて御覽じて、いといたくあはれがらせ給ひて、ものもきこしめさず、御遊びなどもなかりけり。大臣・上達部を召して、「いづれの山か天に近き」と問はせ給ふに、ある人奏す、「駿河の国にあるなる山なん、この都も近く、天も近く侍る」と奏す。これを聞かせ給ひて、

逢ふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬もなにかはせむ

かの奉る不死の薬に、又、壺具して、御使に賜はず。勅使には、調石笠といふ人を召して、駿河の国にある山の頂に持て着くべきよし、仰せ給ふ。嶺にてすべきやう教へさせ給ふ。御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし、仰せ給ふ。そのよし承りて、士どもあまた具し

て山へ登りけるよりなん、その山を「ふじの山」とは名づけける。その煙、いまだ雲の中へ立ち昇るとぞ、言ひ伝へたる。「いづれの山か天に近き」と下問した時、既に帝は不死の薬の処置を心に決めていた。が、それはすぐには明かされない。「死ぬ薬もなにかはせむ」——どうやら飲まないとはい。では具体的にどうするのか。ややじらされた後、「御文、不死の薬の壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし、仰せ給ふ」と、ようやく明らかにされる。帝は、天に最も近い山、すなわちかぐや姫の居所に最も近い山の頂で燃やさせるのである。

この場面について、鈴木日出男氏は次のように言う。

そして、この（『最愛の娘を喪った親たちの、堪えがたい悲しみの生きざま』——岡崎注）延長上に、最愛の女性をわがものにしえなかつた男としての帝の、諦めがたい執着が絶望的に語られていくのである。その絶望感は、「逢ふことも」の歌に端的に現われていよう。（中略）「逢ふことも無み」「涙」の掛詞によつて、悲嘆の涙におぼれる苦しみがかたどられているために、その生きていくかぎりの堪えがたさから不死の薬も不用といわざるをえない。不死の薬ゆえの、未来永劫にわたる苦しみに堪えたいのである。かぐや姫のなした唯一の厚志は、帝にしてみれば最も苛酷な苦行にはかならなかつた。誰しもが憧れてやまない不死の薬がそのように苛酷なのは、かぐや姫を断念することのできない帝の愛憐のためである。帝はその執着を断ち切るために、天に最も近い場所ですべての薬を焼き捨てさせる。かぐや姫のいる天に最も近い場所を選んだのはすぐれて名案だつ

たけれども、じつはそこに、かぐや姫への無意識のこだわりがあつた。このことから、帝は生かされているかぎり、そうした執着から逃れることのできない存在となつていよう。

帝の「逢ふことも……」の歌は、それ自体取り出して見ると、確かに愛別離苦の情が流露しているように読めるし、また、それが妥当な読み方でもあろう。しかしながら一方で、果してこの歌の表現を額面通り受け取り、この場面を帝の執着・絶望の場面として読んでしまつてよいものかどうか疑問の生じるところでもある。帝とかぐや姫の関係は、三年前の帝の求婚時に置いて既に実質的な破局を迎えていた。そして、かぐや姫への執着はその三年間でかなり鎮静化しており、かぐや姫に月の都から迎えが来ると聞かされても冷静でいられるだけの心の余裕を持っていた。そのような帝が、かぐや姫が昇天してしまつたからといつて、翁と同じ次元で悲しみ、執着し、絶望するなどということがあるだろうか。「逢ふこともなみだに浮かぶ」とはあが、帝は決して泣き悲しんではいけない。翁は「血の涙を流して」泣いたけれども、帝は涙一つ見せてはいない。少なくとも泣いたとは語られていない。この歌の前後の地の文は帝の外面的行動のみを淡々と畳み重ねており、その歌の抒情性を冷酷に打ち破っている。「逢ふこともなみ」と「涙」との掛詞は、和歌の修辭的技巧上のことに過ぎないのではないのか。

かぐや姫昇天の報告を受けた時の帝の様子は、「かぐや姫の御文を」ひろげて御覧じて、ものもきこしめさず、御遊びなどもなかりけり」と語られていた。一見するとこれは、翁の悲しみぶりと同様、地上に棄て残された男の絶望的な悲しみぶり

あるかのように思われる。しかし、よく読めばわかるのだが、「ものもきこしめさず、御遊びなどもなかりけり」というのは、かぐや姫の昇天それ自体によつてもたらされたものではなく、かぐや姫が昇天直前に書き残した「御文」が帝を「いたくあはれがら」せたためにもたらされたものなのである。すなわち帝は、「かくあまたの人を賜ひて止めさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、取り率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕へ仕うまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば。心得ず思しめされつらめども、心強く承らずなりにしこと。なめげなるものに思しめし止められぬるなん、心にとまり侍りぬる」とて、

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける
というかぐや姫の「御文」に、かたくなだつたかぐや姫の結婚拒否の真意と真情とを知つて、深く心を動かされたのである。これは絶望でも悲嘆でもない。そのような次元を遙かに超えている。従つて、不死の薬焼却の決定も、翁の場合のように取り乱した一時の感情によるものや「執着を断ち切るため」のものではあるまい。

「天に近き」山で燃やさせたのは、不死の薬だけではない。それとともに「御文」をも燃やさせた。この「御文」が誰の御文であるのかという点に關して、説は大きく二つに分れている。一つはかぐや姫が帝に書き残した御文とする説であり、もう一つは帝からかぐや姫へ宛てた御文とする説である。不死の薬とともに燃やさせたのは、かぐや姫の御文であるのか、帝の御文であるのか。この問題は、上述の読みを左右する。

益田勝美氏は、「アメへ焚き上げる煙」が「人間から神々への交信」の手段となるという古代の想像力を根拠に、この「御文」を帝の御文としている。氏の言うように「竹取物語」全体の構造が「神話的想像力の残留要素によりかかつてい」ることを思う時、この論は説得力を持つ。

また、富士の煙を人を恋する「思ひ」の煙とする和歌の発想は、「竹取物語」成立当時既に常識であつた。このような和歌的常識からすれば、野口元大氏の言うように、「竹取物語」の中の富士の煙は帝の「思ひ」の煙ということになり、従つて燃やした「御文」は帝の「思ひ」の御文ということになる。時代は大分下るが、「風葉和歌集」に、

あふ事のなみだにうかぶわが身にはしなぬくすりもなに、
かはせむ
とて、不死のくすりもこの御うたにぐしてそらちかき
をえらび、ふじのやまにてやかさせ給へりけるとな
ん。

という形で帝の歌が採録されているのは、おそらくはそのような和歌的常識による「竹取物語」享受のありようを示していると考えられる。

このように、古代の想像力・和歌的常識という点からすると、燃やした「御文」は帝の御文であるということになる。これは非常にわかりやすいし、それゆゑ説得力もある。しかしながら、「竹取物語」がそういったものをどれだけ引きずつたものであるのかということは、やはり「竹取物語」それ自体を見なければ何とも言えない。

物語の叙述をごく素直に読めば、不死の薬とともに燃やした「御文」はかぐや姫の御文と見る他ない。先に引用した帝の後日譚場面の傍線部分「かの奉る不死の薬に、又、壺具して」は本文に問題があり、ここをどう校訂するかについては論の分れるところなのではあるが、いずれも「又」を「文」の誤写とする認識においては共通している。「又」が「文」であるならば、その「文」は「不死の薬」とともに「かの奉る」という限定を受けるわけであるから、やはり燃やした「御文」はかぐや姫が昇天直前に帝へ書き残した御文であると解するのが自然であろう。それに、物語のどこにも、帝が月の都のかぐや姫へ宛てて御文を書いたなどは語られていない。

帝は、かぐや姫への御文を書いたり、それを燃やした煙を回路にかぐや姫との交信を図ろうとしたりするなどの未練の行動に出てはいない。やはり帝は見苦しい執着などしていないのだ。確かにそう読める。つまりは、『竹取物語』は、古代の想像力や和歌的常識に対するパロディーになっているのである。

「逢ふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ薬もなにかはせむ」と、帝は不死の薬を燃やす。その場所として天に最も近い山の頂を選んだのは、そこがかぐや姫のいる月の都に一番近い場所だからであるが、それは未練の選択などというものではない。天に向ってこれ見よがしに燃やすのである。このように不死の薬を燃やすことは、地上が、月の都と同じ不老不死の異郷に近づくことを自らの意志で拒絶することに他ならない。そして、そこで同時にかぐや姫の御文を燃やしてしまうということは、異郷へのこだわりともなりかねない異郷の痕跡をも地上

から完全に抹消しようとする意志の徹底を示している。帝は、ここに地上の自立を宣言したのである。このように読む時、「死なぬ薬もなにかはせむ」というかぐや姫への反発は、その真実をあらわす。

八 『竹取物語』をどう読むか

前節において述べた帝の後日譚場面の読みは、八月十五日に月の都からかぐや姫を迎えが来るという報告を帝が受ける場面にかぐや姫に対する帝の執着心の鎮静化が伺えるという、前々節に示した読みに基づいたものである。しかし一方で、そうして得た読みは、我々が一般に後日譚場面の表現それ自体から受ける印象とは大分違ったものになってしまっている点で不安を感じさせもする。帝の後日譚場面は、ごく素直に見るとやはり、先に引用した鈴木日出男氏の論の如く、愛別離苦の絶望的な悲しみと執着とをたたえた場面として読めてしまうのである。いったい、これは何故なのであろうか。最後にこの問題を考えることにする。

まず初めに、前々節において取り上げた、帝がかぐや姫の昇天予告を知らされる場面についての再検討を行なう必要がある。私は、この時の帝の対応の仕方にかぐや姫に対する執着心の鎮静化を見たのであるが、果してそれだけでよいのだろうか。自ら昇天阻止に行けないことに対する葛藤・苦悩がないのは、かぐや姫に対する執着心が鎮静化していたからなのだろうか。

注意しなければならないのは、その場面の語られている所謂

「天の羽衣」の段が翁―かぐや姫の関係を語ることを物語の大枠としていうことである。つまり、その枠内において問題となるのはあくまで翁―かぐや姫両者の関係なのであって、極論すれば帝のことなどはどうでもいいのである。説話レベルにおいて、そこで帝について語られることはまずない。そのような枠内において『竹取物語』の作者が帝を登場させるのは何故か。それは、帝にかぐや姫が八月十五日に昇天するということを知らせ、当日竹取の翁の家へ軍勢を派遣させるためである。翁―かぐや姫の関係を語る枠内に帝が登場するというのは説話の文体を超えた文体を示すが、依然作者にはその場面の大枠の力が強力に作用するため、帝については付与された役割以上のことは問題にならない。帝の葛藤・苦悩の姿が描かれたいのかぐや姫に対する執着心が鎮静化したために葛藤・苦悩しないという帝の心の内面の問題ではなく、物語の大枠がそこまで描く必要性を作者に認めさせないからなのである。

このことを具体的に証明することは困難であるが、この場合と同様場面の大枠の力が作者に強力に作用し作者を規制していると考えられる例を一つ、傍証として挙げておく。それは、帝の求婚譚における翁の裏切りの問題である。

帝の求婚譚において、翁はかぐや姫を裏切っている。既に見た如く、叙爵に目が眩んで帝に懐柔された翁はかぐや姫に官仕えをするよう説得するが、かぐや姫の猛烈な抵抗に、ついに「天下のことは、とありとも、かかりとも、御命の危きこそ、大きな障りなれば、なほ仕うまつるまじきことを、参りて申さん」とその断念を明言する。一見すると再びかぐや姫の味方

に戻ったようだが、実は翁はまだあきらめてはいなかった。帝が「造麻呂が家は、山本近かなり。御狩行幸し給はんやうにて、見てんや」と言った時、翁は「いとよきことなり。なにか心もなくて侍らんに、ふと行幸して御覽せむに、御覽せられなむ」と何のためらいもなくゴー・サインを出してしまうのである。これはまさに背信行為であり、裏切りに他ならない。

長者となった人間が裏切り行為によって富とその源である異族とを失ってしまうパターンのものである。竹取の翁はかぐや姫のおかげで豊かになり長者となった。その翁が、そのかぐや姫を裏切ってしまうのである。当然、翁はその報いとしてかぐや姫を失い没落しなければならないはずである。ところが、翁は何の報いも受けていない。物語の最後で翁はかぐや姫を失うのであるから、それがその報いではないのか、と考えるむきもあるかもしれない。実際、この翁の裏切りがかぐや姫との別れを決定的にした翁側の原因となつていて、そこに因果関係を認めようとする論もある。しかしながら、物語の叙述の上では、そのような因果関係は全く認められない。翁の裏切りから三年たつて昇天するというのもおかしいし、また、翁の裏切りの後両者の間に成立していた親子関係に何らかの破綻が生じたということもない。破綻どころか、かぐや姫は昇天を前に翁への愛情ゆえに苦悩している。それに何よりも、かぐや姫を迎えに来た天人の中の「王とおぼしき人」の、

かぐや姫は、罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれがもとに、しばしおはしつるなり。罪の限り果てぬれば、

かく迎ふるを、翁は泣き嘆く。能はぬことなり。

という言葉には、かぐや姫の月の都への帰還が、地上の翁とは一切かかわらない、月の都の側からの一方的な理由によるものであることが明白である。翁は確かにかぐや姫を裏切った。なのにその報いとしては何一つ受けていない。これはいつたい何故か。

今まで翁の裏切りを強調してきたが、翁のためにも一言弁明しておくならば、それは帝の求婚譚の枠内においては不可避なことであつたということである。帝の求婚譚の枠内においては、当然のことながら帝はかぐや姫に自ら求婚してかぐや姫と直接接触を持たなければならぬ。そのような物語の大枠内に翁を登場させるのであれば、翁に帝自らの求婚の邪魔をさせることはできない。翁にはどうしても、かぐや姫を裏切つて帝の味方になつてもらわざるを得ないのである。でなければ、帝の求婚譚の大枠は崩壊してしまう。翁の裏切りというのは、帝の求婚譚の枠内に翁を登場させた結果必然的に生じざるを得なかつたという質のものなのであつて、決して、「うつろいやすいひとのころの興味」¹⁰などから作者が意図的に行なわせたという質のものではないのである。

翁の裏切りが語られる場面は、帝の求婚譚の枠内にある。この枠内において問題となるのはあくまで帝―かぐや姫両者の関係であつて、翁―かぐや姫の関係はあまり問題にならない。そのような物語の大枠の力が作者に強力に作用している以上、翁の裏切りが長者没落譚のモチーフとして作者に捉え返されることはない。その翁の裏切りが作者の意図と無関係であるならば

なおさらである。それゆえそこに長者没落譚の話型の力が作用することはない。だから、翁は裏切りに対する報いを受けることがないのである。翁がかぐや姫を裏切るのも、翁がその報いを受けないのも、すべては物語の大枠の力が作者に強力に作用し作者を規制しているからなのである。

さて、かぐや姫の昇天予告を知らされた時の帝についての叙述が、そこで作者に作用している物語の大枠の力による場当り的なものである面が強く、作者の人物造型意識のないものであるとするならば、そこに読みとれる帝の執着心の鎮静化ということに基づいて、以降の場面において帝が造型されることはあり得ない。かぐや姫昇天後の後日譚場面を叙述する際に作者には羽衣説話の話型の力が作用する。それゆえ、表現としては愛別離苦の絶望的な悲しみと執着の場面として描かれることになる。帝が「逢ふこともなみだに浮かぶわが身には死なぬ葉もなにかはせむ」という、地上に棄て残された男の絶望的な叫びの表現の歌を詠むのはこのためである。帝の後日譚場面が表現としてそうなっているのだから、そこから受ける印象と前節において述べた読みとの間にギャップが感じられるのは、当然と言えば当然のことなのである。

以上は「竹取物語」の表現の側の問題であるが、もう一つ、「竹取物語」を読む我々の側の問題もある。つまり、我々の意識の根底に、天女昇天後の後日譚場面は絶望的な悲しみの場面でなければならぬという、羽衣説話の話型に規制された認識があるために、帝の後日譚場面をそう読んでしまうのだということも考えられるのである。どうも「話型」というものは、人間

の心性の根源に根ざした普遍的なものであるようだ。

『竹取物語』は、説話の持つ〈話型〉を比較的そのままの形で抱えている。〈話型〉は人間の心性にかかわる身体的なものであるだけに、我々はそれに振り回されやすくもある。『竹取物語』を読む際には、この点をよく心しておかなければなるまい。我々自身が〈話型〉を超克していなければ、『竹取物語』の真の姿は見えてこないのだから。

注

〈1〉日本古典全書『竹取物語・伊勢物語』(昭和三十五年七月、朝日新聞社)解説四頁。

〈2〉三谷栄一「源氏物語における物語の型」(『源氏物語講座』第一巻 主題と方法)所収、昭和四十六年五月、有精堂。

〈3〉『今昔物語集』の引用は日本古典文学大系本による。

〈4〉『今昔物語集』所載竹取説話の成立」(『平安朝文学研究』第三卷第二号、昭和四十六年十二月)。

〈5〉三谷栄一「物語史の研究」(昭和四十二年七月、有精堂)に詳しい。

〈6〉調査にあたっては、次のものを使用した。

『海道記』——江口正弘『海道記の研究 本文篇研究篇』(昭和五十四年十二月、笠間書院)に翻刻されている尊経閣文庫本。

『古今集注』・『和歌百首注』——三谷栄一「物語文学史論」(昭和二十七年五月、有精堂)。

『昆沙門堂本古今集注』——『未刊国文古註釈大系第四冊』(昭和十年二月、帝国教育会出版部)。

『古今為家抄』、『古今和歌集大江広貞注』——片桐洋一「中世古今集注釈書解題一」(昭和四十六年十月、赤尾照文

堂)。

『古今和歌集序開書三流抄』・『頓阿古今序注』・『了蒼古今序注』——片桐洋一「中世古今集注釈書解題二」(昭和四十八年四月、赤尾照文堂)。

『三国伝記』——池上洵一校注『三国伝記(下)』(昭和五十七年七月、三弥井書店)。

『臥雲日件録抜尤』・『聖徳太子伝拾遺抄』・『詞林采葉抄』・『本朝神社』——注5前掲書。

〈7〉『竹取物語』の引用は日本古典文学大系本による。ただし、表記については私に改めた。

〈8〉注4論文。

〈9〉鈴木日出男「和歌の対人性——求婚の歌と物語」(『国語と国文学』昭和五十八年五月号)。

〈10〉益田勝美「日知りの裔の物語——『源氏物語』発端の構造——」(『火山列島の思想』所収、昭和四十三年七月、筑摩書房)一八〇頁。

〈11〉『竹取物語』の帝がこのタブーに規制されていることは、求婚失敗後の歌の贈答によって「いかがり帰りはん空もなく思さ」れたにもかかわらず、「さり」とて夜を明かし給ふべきにあらねば」と還御するところに明らかである(野口元大校注 新潮日本古典集成『竹取物語』六六頁頭注、昭和五十四年五月)。

〈12〉注10論文に詳しい。

〈13〉『竹取物語』の異郷と現実——語りの眼」(『国語通信』二四八、昭和五十七年九月)。

〈14〉「光源氏の退場——『幻』前後——」(『文学』昭和五十七年十一月号)。

〈15〉『古今和歌集』仮名序に、「富士のけぶりによそへて人を

こひ」(角川文庫本)とある。

〈16〉「本文一字の改訂と尊重と——竹取物語とうつほ物語の一例——」(『日本文学』昭和五十四年八月号)。

〈17〉本文の引用は、久曾神昇・樋口芳麻呂・藤井隆共編『物語和歌総覧 本文編』(昭和四十九年六月、風間書房)による。

〈18〉藤井貞和「物語の神話構造——〈異郷〉論ふうに」(『深層の古代——文学史的批評——』所収、昭和五十三年四月、国文社)。三谷栄一編 鑑賞日本古典文学『竹取物語・宇津保物語』(昭和五十年六月、角川書店)一八七頁。

〈19〉注18 藤井論文、九〇頁。